

最近のエビデンスに基づいた冠動脈疾患の 治療戦略

種本 和雄 川崎医科大学心臓血管外科

SYNTAX study 3年目の成績が2010年の夏に公表され、今後4年目以降の成績も順次発表される予定で、学会では様々な議論が起こっている。その他にも冠動脈疾患の治療戦略に関して、RCTを含めた臨床試験の成績が次々に出てきている。また実臨床の場では、動脈グラフトの多用、off-pumpバイパス術、DES、新しいカテーテル技術、また血管内イメージング法、血流診断などのtoolが揃ってきており、それらを用いて行われた治療成績なども順次発表されてきている。

図1は日本胸部外科学会による学術調査の結果¹⁾である。調査開始以来増加を続けてきた虚血性心疾患の症例数は2003年より減少に転じ、2008年には若干減少に歯止めがかかったものの、一気に増加に転じるまでには至っていない。一方では、わが国の冠動脈バイパス術の特徴はoff-pump CABGの占める率が他の国に比べて極めて高いことであろう。CABG全体に占める割合は60%を超えて、3分の2に近づいている。また、PCIとCABGの件数を比較したときに、その比率が極端にPCIに傾いていることもわが国の特徴といわれ、さまざまな場面で議論を巻き起こしている。

さらに、今年ESC/EACTS guidelines 2010が出されたが、外科側と内科側が十分に患者に情報を提供した上で治療方針を決定することを求めてきている。わが国でもこれら欧米のガイドラインをしっかりと検討し、わが国特有の事情を明らかにして治療方針を考える必要がある。

今回の企画では、最近次々に出てきている新しいエビデンスを用いて冠動脈疾患の治療戦略を再検討してもらうことを目的とした。外科内科それぞれから4人の執筆者の方々に

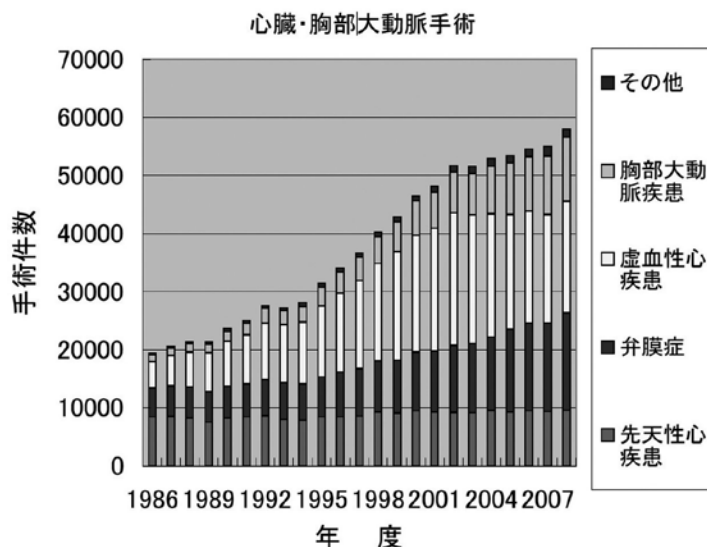


図1

よって詳細な検討と報告がなされ、予想以上に成果のある特集とすることが出来たと思っている。この特集で論じられた点についてしっかり解釈して、各施設での循環器チームの日々の治療方針の適切化に貢献することが出来れば望外の幸せである。またこのような検討は次々に出てくる新しいエビデンスを基に順次更新されていくべきものであり、同様の特集が続いて、常に update されていくことを期待する。

文 献

- 1) Sakata R, Fujii Y, Kuwano H: Thoracic and cardiovascular surgery in Japan during 2008. Annual report by The Japanese Association for Thoracic Surgery. Gen Thorac Cardiovasc Surg 2010; **58**: 356-383